

Title	ロールズのシジウィック批判 : ロールズの正義論は三方法に集約されるのか
Author(s)	森本, 誠一
Citation	メタフュシカ. 2008, 39, p. 87-96
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/11872">https://doi.org/10.18910/11872</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## ロールズのシジウィック批判

—ロールズの正義論は三方法に集約されるのか—

### 森本誠一

#### はじめに<sup>1</sup>

19世紀に活躍した英国の倫理学者ヘンリー・シジウィック（1838-1900）は、主著『倫理学の諸方法（*The Methods of Ethics*）』（以下、『諸方法』と略す）において「常識的な道德の推論に潜んでいる様々な倫理学の方法をできるかぎり明確で十分に説明し、方法相互の関係を示すとともに、それらが葛藤するように思われるところではその問題をできるかぎり明らかにしよう」[ME7, p.14]とした。そこでシジウィックは常識道德（Common Morality / Morality of Common Sense）を反省し、その中から合理的な究極目的と一致する倫理学の三方法、すなわち利己的快樂主義（倫理的利己主義）、直観主義、および普遍的快樂主義（功利主義）の三つを取り上げて考察した。シジウィックのこうした業績は高く評価され<sup>2</sup>、『諸方法』は「これまでに書かれた道徳理論に関する最高の論考」[Broad, p.143]などとも評される一方、その中での一連の議論には批判も多く、とりわけ三方法のあり方を巡っては、ブロード、シュニーウィンド、ロールズらによって批判されてきた。ブロードは三方法の分類が「非常に明確な原理に依拠しているようには思われない」[Broad, p.206]と批判し、シュニーウィンドはそれが当時の代表的な倫理学の立場を反映したものだとして揶揄した [Schneewind, p.199]。また、周知のようにロールズは『正義論（*A Theory of Justice*）』において古典的功利主義と直観主義を批判しているが [cf. Rawls 1971, chap. 1 sec. 5-8]、『政治哲学史講義（*Lectures on the History of Political Philosophy*）』ではより具体的にカントや自らの立場を挙げ、これらが三方法には集約できないとしてシジウィックを批判した [Rawls 2007, p.384]。

<sup>1</sup> 本文中の引用は「 」または前後の行を一行あけることで示した。原文のシングルクォートは〈 〉で置き換えて訳し、訳文に筆者が補足した部分は〔 〕で括弧で明示した。文献を挙げる際には〔 〕で括弧で著者名と頁数、必要に応じて出版年を示したが、『*The Methods of Ethics*』からの引用についてはMEと略記し、そのあとに版数を示すことにした（例えば『*The Methods of Ethics*』の7版であればME7となる）。なお参考文献については文末にまとめて列挙した。

<sup>2</sup> [Schneewind, p.1], [Rawls 2007, p.375, 378], [Broad, p.143]

以上のような批判に応えるべく、本稿では『諸方法』においてしばしば問題にされてきた三方法の妥当性について、ロールズによる批判を軸に検討する。具体的には、まず第1節でシジウィックが合理的な究極目的から三方法を導出するまでの議論を概観するとともに、ロールズが批判している功利主義と直観主義についてシジウィックの説明を確認する。次に第2節でロールズのシジウィックに対する批判の内容を明らかにし、最後の第3節でロールズの批判が妥当なものかどうかを検討する。以上の考察によりロールズの正義論がシジウィックの三方法との関係でどのように位置づけられるのかを明らかにしたい。

### 1.1. 倫理学の諸方法

私たちは日常の様々な場面で倫理的判断を下しているが必ずしも一つの原理に従っているとは限らず、しばしば複数の原理を混合している。

哲学者は逆説の危険を覚悟して原理の統一と〔倫理学の〕方法の一貫性を探究するが、哲学的でない人は様々な原理を同時に抱き、多かれ少なかれ乱雑に結びつけて様々な方法を利用している。[ME7, p.6]

「倫理学の方法」というのは聞きなれない表現であるが、これは「個々の人間が何をなす〈べき〉か、あるいは彼らにとって何をなすのが〈正しい〉のか、また自発的な行為によって何を探求す〈べき〉なのか、あるいは彼らにとって何を探求するのが〈正しい〉のかを決定する合理的な過程」[ME7, p.1] のことである。シジウィックは倫理学の探求を始めるにあたり、まずこうした方法の背後にある実践的原理について検討する。とはいえ人びとが一応の究極目的として従っている原理をすべて網羅することはあまりに複雑で広範なため困難である [ME7, pp.8-9]。そこで彼は「人類の常識にとって合理的な究極目的と思われるもの」[ME7, p.9] を手がかりにして、この問題に取り組む。

例えば「名声のために健康、幸運、幸福を犠牲にする人は多くいる」[ME7, p.9]。究極目的というのは文字通りそれ以上目的を遡ることのできないそれ自体のために目指される目的のことであるから、この意味では名声も究極目的とすることができる。しかし「名声をそれ自身のために追及することが合理的な目的だと熟慮の上で主張するような人は誰もおらず、思慮ある人びとにとっては、(1)それを得る人の幸福の源泉として、(2)道徳的ないし知的に卓越していることのしるしとして、(3)名声はそれを得た人が社会に対して重要な利益をもたらしたことを示すとともに、当人や他の人びとが将来さらに成功するよう刺激するものであるという理由ですすめられるに過ぎない」[ME7, p.9、圏点は筆者による] ため、名声を合理的な究極目的とまでは言うことができない。

こうして人類の常識を反省した結果、シジウィックは幸福と完成あるいは卓越の二つが一応の合理的な究極目的だと結論づける [ME7, p.9]。もちろんこれ以外にも神の意志、自己開発・自己涵養、あるいは自然に従って生きることなど合理的な究極目的だと主張されるものは多くある

が、いずれの説も上の二つに含まれるか合理的な究極目的とは認められないとして退けられる [ME7, pp.78-83]。

これらの目的と一致する倫理学の方法として、幸福からはそれが目指される対象に応じて利己主義と功利主義が、完成あるいは卓越からは直観主義が導かれ、『諸方法』の第2部以降で順次検討されている。以下では本稿での議論と関連のある直観主義と功利主義についてみていきたい。

## 1.2. シジウィックの直観主義

まずシジウィックの直観主義についてみていく前に、そもそも直観主義がどのような立場を代表するものなのか確認しておこう。

現代の倫理学では「私は何をなすべきか」といった規範の内容について考える規範倫理学と「べき」のような倫理学で使われる言葉の意味について考えるメタ倫理学とを分けて考えるのが通例であるが、これと対応するように直観主義にも二つの様相がある。一つは規範倫理学上の立場で、私たちがなすべき行為、道徳的義務、あるいは義務の諸規則は直観という特殊な能力によって即座に知ることができるという立場を表している。直観が何であるのかについては様々な見解があり、伝統的には良心だとする立場と理性の一側面だとする立場が大きく対立してきた。もう一つはメタ倫理学上の立場で、善悪や正不正といった道徳的価値は私たちの信念と独立に存在し、それらは道徳的直観という特殊な能力によって認知できるという立場を表している。

このような直観主義の区別はシジウィック以降の倫理学理論の発展を大きく反映したものであるが<sup>3</sup>、同様の区別と特徴はシジウィックの直観主義においてもみることができる。シジウィックによる直観主義の説明は『諸方法』の第3部第8章で詳しくなされており、そこでは広狭2種類の直観主義と3段階の直観主義が区別して論じられている。

まず狭義の直観主義とは利己主義や功利主義とともに論じられているもので、「無条件に指令されるある種の義務の諸規則や命令に一致することが、道徳的行為の実際上の究極目的とみなすような倫理学の見解」 [ME7, p.96] である。この狭義の直観主義は、「その他の帰結 (ulterior consequences)」<sup>4</sup>を考慮することなく行為が道徳的義務や諸規則に一致しているかどうかによってのみ行為の正しさを判断するため、「その他の帰結」によって行為の善さを判断する利己主義や功利主義とは対極に位置づけられる。

これに対し広義の直観主義は、単に倫理的な価値にとどまらず広い意味で真理の認識に関わるようなものである。広義の直観主義によれば「問題となっている結果は、それによってもたらされる快樂という経験からの推論によらず即座に善いと判断される」 [ME7, p.97]。例えばある行為が幸福をもたらすかどうかは経験から推測できるが、個人や一般の幸福を目指すべきであるとい

<sup>3</sup> 倫理学における直観主義は20世紀に入りメタ倫理学の研究が盛んになるのに合わせて発展してきたが、そのきっかけとなったのがG. E. ムアの『倫理学原理 (Principia Ethica)』である [cf. Moore]。

<sup>4</sup> 「その他の帰結」とは、ある行為によって引き起こされた帰結のことであり、これは私たちが一般に「帰結」と呼んでいるもののことである [cf. ME7, p.96]。これは行為そのものも意志の帰結として捉えることができるため、行為によって引き起こされた帰結のことを特に「その他の帰結」といって区別しているのである [cf. 奥野、14-5頁]。

う原理そのものを経験から導き出すことはできないだろう。したがって、シジウィックによればこうした原理に依拠する利己主義や功利主義も広い意味では直観主義ということになる [ME7, p.98]。

以上のことを踏まえれば、シジウィックの直観主義に対するブロードの次のような批判は妥当なものではないことがわかる。

シジウィックは認識論的な観点からこれら三つの理論がすべて倫理的直観を含んでいると認識しなければならない。というのも二つの類型の快楽主義は、それ以外のものではなく快楽こそが内在的に望ましいという直観を少なくとも含んでいるからだ。したがって彼は「直観主義」の広い意味と狭い意味とを区別しなければならない。 [Broad, p.206]

さて、これとは別にシジウィックが直観主義の3段階と呼ぶものがある。シジウィックによればそれぞれの直観主義は「直観的道德 (Intuitive Morality)」の各段階をなしており、最も低い段階に位置するのが「知覚的直観主義 (Perceptual Intuitionism)」である。「知覚的直観主義」では一般的な規則を参照することなく直観によって個々の行為や動機について道徳的な判断を下す。だが反省的な人はこうした個々の直観を疑う。というのも、直観はその時々によって異なるし、人によっても異なるからである。例えば、私たちは一般に窃盗が罰せられるべきだと考えている。このように考えている人の中には、困窮の末に窃盗した者への刑罰は軽減されるべきだと考える人もいよう。これとは逆にどのような事情であっても窃盗は等しく罰せられるべきだと考える人もいかもしれない。こうした人びとが何らかの規則に基づくのではなく自らの直観に訴えて即座に倫理的な判断を下しているのだとすれば、その判断は「知覚的直観主義」に基づいていることになる。

だがこうした判断はしばしば矛盾を含み、倫理的な判断で要求される普遍性を欠いている。そこで次の段階として「教義的直観主義 (Dogmatic Intuitionism)」が考えられる。シジウィックによれば「教義的直観主義」とは明確で最終的に妥当な直観によって一般的な規則を識別する立場である。三方法の一つとして考察されている直観主義はこの「教義的直観主義」であり、シジウィックはしばしばこれを常識道徳と同じもののように扱っている [ME7, pp.101-2]。ところが、こうした「教義的直観主義」も哲学的な人たちにとっては体系として満足のいくものではない。というのは、一般に正しいと判断される行為規則も哲学的な人たちはなぜそれが正しいのかと掘り下げて問い続けるからである。

こうして第三の直観主義である「哲学的直観主義 (Philosophical Intuitionism)」が要求されることになる。これは常識道徳が与えてくれない哲学的な基礎を求め、現在通用している諸規則が演繹されるような絶対的で否定しようのない真で明白な原理を得ようとするものである [ME7, p.102]。なおシジウィックが自らのことを直観主義的な基礎に基づく功利主義者だと称する場合の直観主義とは、この「哲学的直観主義」のことである<sup>5</sup>。

<sup>5</sup> 「私は再び功利主義者であったが、それは直観主義的な基礎に基づく功利主義者であった」 [ME7, p.xxii]

### 1. 3. シジウィックの功利主義

次にシジウィックの功利主義についてみていこう。ここでも功利主義がそもそものような立場を代表するものなのか最初に確認しておくのがよいだろう<sup>6</sup>。

伊勢田の整理に従えば、功利主義には最大化主義、福利主義<sup>7</sup>、単純加算主義、および帰結主義という四つの特徴がある [伊勢田 2006、3-10 頁] [cf. Sen 1979]。要するに功利主義とは、関係者の福利を等しく考慮して、結果的にそれが最大化されるような行為を道徳的に正しいとみなすような立場の総称である。こうした特徴の中で、例えば「関係者をどこまで含めるのか」、「福利の基準は何に置くのか」、「単純加算した結果を総量で評価する（総量主義）のか、それとも総量を全体の数で割った平均で評価する（平均主義）のか」、さらに「どこまでの帰結を考慮にいれるのか」などによって、様々なバージョンの功利主義が存在する。

シジウィックは一般に古典的功利主義<sup>8</sup>の最後の代表者とされ [Albee, p.358] [Rawls 2007, p.375, 410]、功利主義が最大化を目指す幸福概念については快樂説の立場をとっていた。シジウィックによれば功利主義とは「全体として、つまりある行為によって幸福に影響を受けるすべての人を考慮に入れて、最大の幸福を生み出すような行為がいかなる所与の状況においても客観的に正しいとする倫理学理論」[ME7, p.411] のことである。ここでの「幸福」は非常に広い意味で使われており、それはシジウィックが「幸福と快樂を区別せず、最上のものから最低のものまで、それがあるときには維持し続けるように意志をつき動かし、欠けているときには生み出すように意志をつき動かすようなあらゆる種類の感情や意識を含む」[Sidgwick 1873, p.5, cf. ME7, p.42-3] と考えていたことから明らかである。

### 2. 1. ロールズによる三方法への批判

前節でみたようにシジウィックは常識道徳を反省し、その中から合理的な究極目的と一致する倫理学の方法として、利己主義、直観主義、および功利主義の三つを取り上げて考察した。シジウィックが取り上げたこれらの三方法は、現代の倫理学においても多くの問題が功利主義と直観主義の対立を軸として議論されていることを考えれば、少なくとも倫理学の方法の大枠をとらえていると言ってもよいだろう<sup>9</sup>。しかしながら、功利主義<sup>10</sup>と直観主義をいずれも否定するロールズの立場はどのように考えたらよいのだろうか。ロールズが主張するように正義論はシジウィックの三方法に集約されえないのだろうか。

<sup>6</sup> 但し、現在では非常に多くのバージョンの功利主義があり、もはやこれらをすべて包含するような功利主義の定義はできないかもしれない。

<sup>7</sup> 本稿では「福利」「幸福」「効用」といった用語を特に区別することなく文脈に応じて使い分けている。

<sup>8</sup> 現代の功利主義と古典的功利主義を区別する明確な基準はおそらくないが、19世紀と20世紀を境にしてどちらの時代に属するのかということや、快樂説をとるのかそれ以外の説（例えば選好充足説など）をとるのかといったことが大まかな目安になっている。

<sup>9</sup> もちろん1960年代以降、徳倫理が見直されてきていることは注目に値する。

<sup>10</sup> 具体的にはロールズが『正義論』において批判しているのは古典的功利主義であり、特に彼が念頭に置いていたのはシジウィックの功利主義である [Rawls 1971 pp.19-20]。なお『政治哲学史講義』では、バンナム、エッジワース、およびシジウィックの三者を「古典派 (classical line)」と呼んでいる [Rawls 2007, p. 375]。

この点について 1976 年と 1979 年の秋にロールズがハーバード大学で行った政治哲学史の講義録をみてみよう。以下はロールズがジジウィックの三方法について批判しているくだりである。

私の考えによれば倫理学の方法を三つに集約することは比較の範囲があまりにも狭すぎる。カントの教説やそれと類似した見解が他とは異なった倫理学の方法であることを理解していないのは欠陥である。そして『正義論』はカントの教説に類似した見解である。またジジウィックは誤って完成主義と直観主義を同一視しているように思う。このジジウィックによる比較範囲の溝は彼の見解全体に関わる弱みの一つである。[Rawls 2007, p.384, cf. p.379]

ロールズによれば歴史的に重要な倫理学の方法は三つ以上あり、少なくとも完成主義、カントの教説、およびロールズの『正義論』はジジウィックの提唱する三方法には集約されえないという。ただ、これらのうち最初の二つはジジウィックがすでに『諸方法』において検討していることから、ロールズの指摘が正しいかどうかは読者の判断に任せるとして、ここではジジウィック以降に登場したロールズの『正義論』<sup>11</sup>に焦点を絞り検討していきたい。

## 2.2. ロールズの正義論

周知のようにロールズは『正義論』において功利主義と直観主義を批判し、それとは別の立場として正義論を提唱した。そこでまずロールズがどのような点で功利主義と直観主義を批判したのか確認し、それからロールズの実義論についてみていこう。

まず功利主義に対してロールズは「一人の人間にとって合理的な選択の原理を社会全体に適用する」ものであって、「個人間の違い (distinction between persons) を深刻に考えない」と批判する [Rawls 1971, pp.23-4]。例えば暴動を沈静化するために無実の人を捕まえて処刑することが全体として満足を最大化するならば、功利主義ではそのような行為が不正だということはできないだろう。もちろんロールズもこのようなことが十分に文明化の進んだところではまず起こらないと認めているが [Rawls 1971, p.23]、ロールズにとって重要なのは功利主義が現実にはどのような行為を命じるかではなく、原理的にどのような行為を排除できないかということであった。正義論の要点を先取りして言うと、ロールズの主張する「公正としての正義 (justice as fairness)」では「正が善に対して優先する (priority of the right over the good)」 [Rawls 1971, p.28] ということを中心的な概念としており、ロールズが功利主義を批判するのは功利主義が正よりも善を優先しているからなのである<sup>12</sup>。

それではなぜロールズは正を善よりも優先する直観主義を批判するのだろうか。ロールズによ

<sup>11</sup> 以下では単に「正義論」と言った場合、すべて『正義論』での議論に言及している。

<sup>12</sup> 但しこの点については、ロールズの批判するような仕方では正と善は対立しておらず、むしろ功利主義も正を中心とした理論だとする見解もある [安藤、14-5 頁、257-61 頁]。キムリッカによれば効用の最大化が平等原理の帰結だとする議論はミルに始まり、ハーサーニー、グリフィン、シンガー、ヘアなど現代の功利主義者たちによって明確に支持されている [Kymlicka, p.33]。

れば直観主義は「競合する正義の諸原理をどのように重みづけしたらよいかという問題にしっかり答えられない」[Rawls 1971, p.36] という。

つまり功利主義は何が善であるかを決定するための究極的な原理を有しているが正を善よりも優先せず、直観主義は正を善よりも優先するが競合する直観を調停するための原理を欠いているというわけである。ロールズが正義論を構想するに至った背景にはこのような状況があった。それではロールズ正義論とはいったいどのような理論なのだろうか。

まずロールズは正義の諸原理を「自分自身の利益を増進することに関心のある自由で合理的な人びとが平等な初期状態にあるときに、自分たちの連合体の基礎的な条項を定めるものとして受け入れるであろう諸原理」[Rawls 1971, p.10] と定義する。ここで「平等な初期状態」というのは、ロールズが「原初状態 (original position)」と呼ぶ「ある一定の正義構想へと至るよう特徴づけられた」[Rawls 1971, p.11] 仮説的状況のことである。そしてこの「原初状態」の下では「誰も社会の中での自分の位置や階級上の地位あるいは社会的身分を知らないばかりでなく、生来の資産や能力、知性、体力その他の分配における自分の運も知らない」とされている。ロールズは正義の諸原理をこのように考える方法を「公正としての正義」と呼ぶのだが [Rawls 1971, p. 10]、それは「原初状態が適切な初期の状態であり、したがってそこで到達された基礎的な合意は公正である」[Rawls 1971, p.11] という考えに基づいている。

だが「原初状態」で合意された正義の諸原理が私たちの直観に反することはないのだろうか。ここでロールズは「反省的均衡 (reflective equilibrium)」という考え方を提示する。これはもし正義の諸原理と私たちの直観が一致しない場合、「初期状況の説明を修正するか現在の判断を改める」[Rawls 1971, p.18] ことによって、さしあたり両者が一致する点を探ろうとするものである。もちろん一度均衡がとれていても、その均衡が崩れたときには再び均衡が保たれるまで修正が繰り返される。

以上のような条件と手続きによって正義の諸原理を考えるのがロールズによる正義論の概略である<sup>13</sup>。

### 3. ロールズによる批判の検討

さて、こうしたロールズの批判に対してシジウィックの立場からはどのようなことが言えるのだろうか。確かにロールズの『正義論』を巡っては、これまで多くの論争が現代の功利主義者、厚生経済学者、および共同体主義者たちとの間で繰り広げられ、ロールズによる当初の主張も（洗練されたかどうかは別として）かなり修正されている。しかしながら、ここではあえてそうした論争にはコミットせず、前節で取り上げたロールズの批判に対してシジウィックの立場からどのようなことが言えるのかを考えてみたい。

先にみたようにロールズは直観主義の問題を優先順位の問題と位置づけた上で、自らは契約論

<sup>13</sup> ロールズの主張はその後の修正によってかなり複雑化しているが、シジウィックの三方法との関係を論じるというここでの目的にとっては、以上の説明で十分であろう。

の立場に立ち、正義の諸原理を「原初状態」における自由で合理的な人びとによる合意に求めた。だがこれは直観への依存を排除したわけではなかった。

優先順位の問題に取り組む際の課題は、諸々の直観的判断に対する依存を減らすことであり、そうした依存を完全に除去することではない。どのような種類のものであれ直観への訴えをすべて避けられるとか、そのようにすべきだとか想定する理由はない。[Rawls 1971, p.39]

つまり「どのような正義構想もある程度は直観に依拠せざるを得ないだろう」[Rawls 1971, p.36] とロールズ自身が認めているように、彼の正義論は決して直観を排除しようとしたものではなく、直観への依存を弱めることで従来の直観主義が抱えていた優先順位の問題に取り組んだものなのである。ロールズは「認識論的な教義は直観主義の必須部分ではない」としてシジウィックが広義の直観主義と呼んだものを狭義の直観主義から切り分けた上で、「常識的な直観主義はむしろ特定の諸規則からなる集合という形式を取り、それぞれの集合は正義の特定の問題に適用される」と論じており [Rawls 1971, p.31]、彼が直観主義という用語をシジウィックの教義的直観主義と同義かそれに近いものとして使用していたことは間違いない。

しかしながらロールズ正義論は「原初状態」での合意に基礎を置く契約論であるため、シジウィックの直観主義が前提とする「無条件に指令されるある種の義務の諸規則や命令」[ME7, p.96] のようなものを受け入れない。このことから、確かにロールズ正義論は教義的直観に依拠してはいるものの、シジウィックの直観主義には収まりきらない広がりを持っていると言えるのかもしれない。

## おわりに

これまでの議論によって、正義論はシジウィックの三方法に集約されえないというロールズの主張を検討してきた。当初はロールズ正義論もシジウィックの直観主義に含まれるという想定のもとに本稿を書き始めたのだが、執筆の途中で立場が二転三転したため、議論が迷走した感否めない。そこで本稿では上記の問題について断定的な結論を下すことは避け、これまでの議論で明らかになった以下の二点を以って本稿の結論としたい。(1) ロールズ正義論はシジウィックが批判した狭義の直観に依拠しており、依然として三方法に集約される可能性は残されている。(2) ただし正義論の契約論的側面には、必ずしもシジウィックの直観主義に収まりきらない余白が残されている。

## 参考文献

### 【1次文献】

- Sidgwick, Henry, *The Methods of Ethics*, 7th ed., (1907) in *The Works of Henry Sidgwick*, Bristol: Thoemmes Press, 1996.
- —, “Utilitarianism” (1873) in *Essays on Ethics and Method*, Singer, Marcus G. ed., Oxford University Press, 2000.

【2次文献】

- Albee, Ernest, *A History of English Utilitarianism*, New York: Macmillan, 1902.
- Broad, C. D., *Five Types of Ethical Theory*, London: Routledge and Kegan Paul, 1930.
- Hare, R. M., "Rights, Utility, and Universalization: Reply to J. L. Mackie" in *Essays on Political Morality*, Oxford: Clarendon Press, 1989, pp.79-95.
- Kymlicka, Will, *Contemporary Political Philosophy*, 2nd ed., Oxford: Clarendon Press, 2002. (邦訳：千葉眞・岡崎晴輝他訳『新版 現代政治理論』日本経済評論社、2005年)
- Moore, G. E., *Principia Ethica*, 1903, Cambridge University Press. (邦訳：深谷昭三訳『倫理学原理』三和書房、1977年)
- Rawls, John, *A Theory of Justice*, revised ed., Harvard University Press, 1971. (邦訳：矢島鈞次監訳『正義論』紀伊國屋書店、1979年)
- ———, *Lectures on the History of Political Philosophy*, Samuel Freeman ed., The Belknap Press of Harvard University Press, 2007
- Schneewind, J. B., *Sidgwick's Ethics and Victorian Moral Philosophy*, Oxford: Clarendon Press, 1977.
- Sen, Amartya, "Utilitarianism and Welfarism" in *The Journal of Philosophy* 76, 1979, pp.463-89.
- Singer, Peter, "Sidgwick and reflective equilibrium" in *The Monist* 58, 1974, pp.490-517.
- 安藤馨『統治と功利 功利主義リベラリズムの擁護』勁草書房、2007年
- 伊勢田哲治・榎則章編『生命倫理学と功利主義』ナカニシヤ出版、2006年
- 奥野満里子『シジウィックと現代功利主義』勁草書房、1999年
- 福岡聡『ロールズのカント的構成主義 理由の倫理学』勁草書房、2007年  
(もりもとせいいち 臨床哲学・博士後期課程)

## Rawls's criticism of the Sidgwick's three methods of ethics Seiichi MORIMOTO

In his *Methods of Ethics*, Sidgwick examines three methods of ethics that he finds implicit in our common moral reasoning, namely egoistic hedonism (egoism), intuitionism, and universalistic hedonism (utilitarianism). However Rawls holds it defect for Sidgwick not seeing *A Theory of Justice* as distinctive method of ethics. In this paper I examined the argument by Rawls that his theory of justice cannot be reduced to the Sidgwick's three methods of ethics. In the first section, we take a general view of intuitionism and utilitarianism of which Sidgwick expounds in *the Methods of Ethics* are explained. Then in the second section, we review and clarify the argument by Rawls. And in the third section, Rawls's criticism of the Sidgwick's three methods of ethics is examined. The close examination in this paper shows that (1) though the theory of justice appeals to intuition, (2) it may be reduced to intuitionism.

〔キーワード〕

シジウィック、ロールズ、直観主義、功利主義、正義論